

嚶鳴館遺草卷第三

もりかがみ

○およそ草木を植そだつるに、二葉三葉より成長

して用にたつ木草となるまでには、始中終の

三段あり。草に勁草あり、木に堅木あり。然ども

そのはじめ苗草苗木の時は、いづれもしなやかに

して、直にもそだち曲てもそだつべし。是其始也。

既に草となり木となれば、勁き質の草木は

年月につよみわたりて、副木をたて縄をまとひて、

のべかがめんとすれども、最早こころのままならず。

是中也。花さき実なり、枝さし、葉茂りて、それぞれ

の用にたつほどになりおふせたるは終也。まづ此

始中終の養ひに心をつくべきこと也。苗木苗草

の時より心をつけて育れば苦労もなく良草

良木の用を成すこと也。しかし苗木の自由になれ

ばとて無理に曲撓めて心のままにせんとすれば

いかなる勁草堅木も或は枯、或はいたみて、たとひ

年月を経てもいじけ、ひねびて、材用に備ふべからず。

草木のみにあらず禽獣も又しかり。駒児、犢牛、犬子、

猫児の育まで始中終はあるもの也。故によく獸を飼ふものは、始中終に随ひ無理をほどこさずして、それぞれの生を遂しむ。人は万物の靈貴なるものといへども、始中終のあることは聊も異なることなし。故に古の聖人教誨の道をつとめて人情を遂さしめ給ふ。尊卑貴賤品かはれども教といふ道をすてて性命をたつべき道なし。さて其教の法に始中終をわけて、天の性に逆ひもどらぬやうに定めおき給ひしこと也。

○人の始中終は幼少を始とし、強壯を中とし、老衰を終とす。この三時に随ひ教戒を施す法、一同ならずといへども、先おほよそを語らば、聖人の教は乳をふくみて眠り、飯をくくめられて戯るる孩児には、元服して上下着こなしたるもの、わざをさせず。上下着こなして元服したればとて、頭はげて額にしわのよりたるもの思慮分別をせめず。少壯老の三の時に随ひて其みごとなるべきことをなさしむるやうに教ること也。但し人は万物の靈にて、心もまた靈知はやきものなれば、苗木苗草の時より其身其程につれて、

善心善行にむかふやうにと、導き教ることも、また大事の教也。無理にまげたわめねども、自然と成長せしめて、それぞれの徳を成就せしむることいたらぬ所もなきは、聖人の教なり。すでに胎教といひて、懐妊のはじめより視聽言動をつつしませて、生るる子の吉祥を望むことなれば、まして生れたるうへのことは申にも及ざること也。故に教の道は先第一に教る人の善悪邪正を撰にありて、幼弱当身の上をせむるのみにあらず。習慣は自然の如しと孔子も仰られて人君の尊貴なるより衆庶の卑賤なるに至るまでその習慣する處を慎むこと人を教るの極意なり。

○無位素賤の人の子は僅に乳ぶさを放れ候ころより、うちには父母兄長の威を恐れ、外には他人の戒を憚りて、いまだ是非の道理は弁へしらねども、何となく遠慮挨拶するものといふことを知る。是素賤の人の人を畏敬するに習ひ慣たるもの也。然るに尊貴の人の子は胎内よりひとにうやまはれ出生し給へば、其俣おびただしき尊崇

をうけて、僅に人を見知り給ふより、人々畏敬の心をいだき、前に伺候する程の者は息をひそめ容を守りて、先其座の機嫌をのみはかりて取扱ひ奉ることにて、たとひ父母兄長の教戒をうけ給ふほどのことありといへども、稀たまさかなることにて、其余は常に臣妾の介抱のみにそだち給ふことなれば、幸に善良の質を受給へば、それが中にも賢明の君とはなりたまふもあれども、もし不幸にして驕傲の氣象を受給へば、遂には暗愚暴戾の君に終り給ふ。古今みなしかり。是ひたすら人に畏敬尊崇せらるるのみ習慣して、人を畏敬尊崇するに習慣し給はざる故也。故にいにしへより師傅の礼を尊くして其威を嚴にし、日夜にその教戒を服受して、畏敬尊崇する道を習慣せしむること、いにしへの三公三孤のまうけは是が為也。礼記には天子の太子といへども、学宮に至り給へば年長の下に座し給ふことをしるし、又天子に、ものををしへ申時は臣下といへども北面せぬといふことをしるせり。是にて古の教をかながみるべし。幼より

習慣する所を慎ましめて、いつの程にか賢明の徳を成就すること、苗木苗草の時より手木をそへ力繩をはりて、屈曲をふせぎ良草良木の用を成就すると異なることなし。

○教あり類なしと、孔子ものたまひつれば、人はただ、をしへ次第なるもの故に、教る人を撰むこと最初第一の要なり。曲れる木をたてて直なる影を得べからず。よからぬ教戒の下に、よき人の出くべき道理なし。但し直なる木をたてて正しき影を求めんとすれども、日月の光なくし

てはかげはささぬものなり。師傅の礼を尊とからしめ、その威を嚴にあらしめ給ふことは、先君の命爵を尊とくし、愛敬をあつくし給ふより始ることなり。いかばかり忠賢の士といへども受る所の命いやしく、遇せらるる所の恩疎なれば、世子の畏敬をおこすべき道なし。

○師傅一人忠良を得といへども、近習の臣和一ならざれば、養長の道達することなし。幼き御心にて誰彼がいへる所はよく、これかれが申し所はよからずなど弁別し給ふべき道理なし。一かた

にては宜しと申、一かたにては悪しと申、一人
とふるまへば、又一人はかくして見せ奉るときは、
かならず心まどひ給うて、はてはては自己の心
よく思ひ給へるかたに、落着し給ふより外はなし。
これ教の敗るる所なり。師傅一人いかばかり忠誠を
尽し候とも、一齊人に衆楚言のたとへにて、遂には
多勢にさまたげらるること、よんどころなきこと也。
且又師傅は世子の尊敬し給ふ人といへども、二六
時中前にも伺候せざれば、退て後は近習の臣、
師傅の教奉りし言行をすすめ諭し奉るを

以て習慣も熟し給ふことなり。若又近習の臣
一言一行も師傅の教を軽じ侮てみせ奉れば、
これぞ一日あたためて十日こごやかすのたとへ
にて、習慣も敗れ給ふもの故にひとり師傅のみ
にあらず、近習の臣に忠良をえらぶこと、是又
大事なること也。古今ともに中以上の君は世子
の為に師傅を撰給ふことは心づき給へども、近習
の臣をえらび給ふに及ばず。たとへば病を治せん
とて、一薬を施し十毒をいまざるが如し。参附
姜桂の良薬といへども、毒に合せて用る時は

毒の能さかんなり。なべて善の重目はかるく悪の重目はおもし。十人の臣に一人不良の臣立まじれば、一人の毒まはり、すみやかなり。尤はやく退くべし。まして十人に三人とも不良の臣交りつかうまつれば七人の忠良は有てもなきが如し。古より然なり。

○賈誼がことばに、天下の命は懸於太子、といへり。国郡といへども其政を目出度せんと思ふ時は、只一人の君の心をたねとして出くること也。されば其君の心を正善に帰し奉ることは、師傅一人の教にかかること故に、師傅の任より重き任はあらじ。師傅の徳は仁厚長者なるを第一として、師傅の才は博学多通なるを第一とす。其人仁厚なれども博通ならざれば晁喻の道ゆきわたらず、其人博通なれども仁厚ならざれば忠篤の誠うすし。この両様を兼たる人を成全の師傅とすべし。但し学徳全備の君子は常にしもあらず。まづ人となりおとなしく正直にして人の賢をねたまず、人の善言をきくを好み、ひとの美行を称することを好み、古今の経籍に

かきしるせる話言といへば、一筋に敬修して一言一行なりとも、日々に人に学び聞て、是を今日の用にたてむと思ふ心のある人ならば師傅の位を授候ても害なかるべし。利口發明に取廻して、是に似て非なる人を此任にすれば、善人は日々にとく、弁佞は日々すすみて、世子の言行を破ることふせぎとどむべからず、尤恐るべきこと也。つまる所は師傅の官に任ずる人は、つとめて学問をすべきことなり。

○六経より以下、諸書に人君の教戒を述たること備らざる所なし。但し世子を教るの術をまとめて手近くみるべきは国語の楚語に申叔時といへる人、世子の教かたを説たること念頃也。漢書の賈誼が伝の治安の策の中に親切に論じたり。この二通りをよくよく読つてみるべし。まづ世子をそだつる道は第一に孝悌の徳をいざなふべきこと也。尊貴の上にては親子の間も疎遠なるものにて、素賤の人のやうに二六時中に顔と顔をも合せざるものなれば、親愛の情も自然と下々のやうにはこまやかならぬもの也。此處をよく心得て、

とにかくに御親子の間の相互になつかしくなり
給ふやうにと心得とりかひ可申こと也。これ孝悌
の徳を長ずるもとなり。下々の上にてだに成人
いたし、妻子をも持候時にいたれば、父母の膝
の廻りにをりし時のやうには親愛の心もなく
なりて、幼年にてきとくに見へ候子も、孝行者
といはるるほどには、つひに得ならぬもの也。まして
貴人の上にては成人し給ふに随ひ、御互の礼節も
おごそかなるものなれば、御幼年の時よりうとうと
しく育ち給へば、のちのちは礼義ばかりになりて
恩愛の情はいつとなく絶はつるやうになり給ふ
も多くあること也。次には驕傲の心吝嗇の氣に
長じ給はぬやうに、人を恕し給ふ心を専にそだ
て奉るべきこと也。孔子も周公の才の美ありとも、
驕りかつ吝ならば、其余は見るにもたらずと仰
られし。驕傲とは氣も心もうはもりて、人をあな
どりかろしめ、すべてものを目下にのみ見給ふ
やうになること也。吝嗇とは財宝をむさぼり、物を
しわく、をしみ給ふこと也。不孝の心は親子の間
疎濶なるより生じ、驕傲の心はあたりに氣遣ひ

し給ふ人のなきより生じ、吝嗇の心は義理をつとめ給ふことを教へざるより生ず。みなみなことごとく習慣せしむる所なり。

○孝愛の情を厚くせんとならば、朝夕に御膝元へ

したしく参り給ひて機嫌をきき給ふやうに

すべし。驕傲の心をおさへんとならば、近習の臣

相互に恭遜にして師傅を尊敬して見せ奉るべし。

吝嗇の心をふせがんとならば、相互に義理をつと

めて見せ奉るべし。恭遜とは、かりにも互にいんぎん

につきあうて、ものいひ挨拶もしとやかに美しく、

かりそめにもあなどりかろしめ候いろなく、人を

たてて我をはらず、あらそひもとるふりを見せ申

まじきこと也。もしあやまりて角たちたる体を

する人ある時は師傅の人これをいましめて、さはい

はぬものぞ、かくはせぬものぞとおとなしくしかり

教へて、それを見せ奉るべし。義理をつとむとは

たとへて申さば、何にても被下候時は、食物はうまく

大きなるを仲間傍輩へも、わかちあたへ、物品は

よきかた見事なるを傍なる人にも、わかちあたへ、

我はあしきかたをありがたく頂戴して、義理を

専にして欲得を第一にせぬふりを見せ奉るべし。
御手遊、御手習、道具筆墨紙とても、取をさむる
ときは、人々に被下候時よごれ損じ候ては悪しく、
夫故に大事にいたし候段を常々をしへ奉り、
衣類調度なども君の為とてはをしまず、のちのち
人へ拝領の為にとて、疎末にし給はざるやうにと
いふところを、かりそめにも見せ聞せ奉るべし。此
心を長じ給へば、人の君となり給ひては御自身
のうへを儉約し給ひて下を恵み給ふものといふ
習ひ癖になり給ふことなり。君上の徳は恭儉に
なつかぬ人もなし。驕傲をうとまぬものもなく、爽利
をよろこび吝嗇をさげすみ奉らぬ人もなし。人心
のなつき奉るは家国繁栄の元、人心のはなれ奉る
は家国衰微のもとひなれば、尤大事なること也。
目前の費をいとひ、やぶさかなる心を持せ奉れば、
儉約とはあたへめぐむものをもあたへめぐまず、
きたなく、しわくして、只金銀の山をのみ積給ふ
こととのみ心得給ふことになりて仁恕の心を失ひ
給ふものなり。仁とは御身のうへはともかくもに
なされ候て、人のうへをあはれみ苦世話に持給ふ

ことなり。恕とはものごとくに思ひやりふかく、人見ずなる
身勝手をし給はざることなり。いにしへの明王賢君
の自己の身を節儉にして、下の恵をあつくし給
ひしことは、書籍にも数々かきしるして、人もよく
しりたること也。ちかき比青山故大膳亮殿は生得質
素なる人にて、よそめにはしわき人のやうに見え
候ひしが、或時外よりかへられ候て、役人共を召出し、
誰彼の宅へ参り、玄関を見れば手広くて自由
もよくみへ候。自分屋敷玄関はことの外せばく
候間、いま一間通りひろげたく思ふ也。大工共に
入用を積らせ候て、見せ候やうにと申付られしに、
役人ども常々しわき氣風を存じ候故に、随分
下直につもらせ、金八両にて出来候由を書つけ
差出せしを、大膳殿つくづく見られ候て、いやいや
無用に致すべし。八両と申金子にては足輕一人
を扶助することぞとて普請をやめられ候よし。
然るに尼が崎居城の節、大坂の御城失火につき、
江戸へ早追の使者を以て注進申され候時、兩人
の使者を目通り近くよび出し、膝の側に小粒
金を紙にもりおきて両の手にすくひて、定めて

手当は役人共より申付候はん。是は自分がやるぞとて、其ものの右の袖へ自身入らる。使の男平伏して退かんと致し候へば、まてまてと申され候て、又両手に一すくひ左の袖へいれられ候よし。兩人へ同様に四すくひ給り候付、兩人も一入忝存じ、道中もはげみ候て、江戸への注進壱番に着いたし、其後大膳殿参府の節、規模なる

上意も有之候よし。且又不断玄関に置付の長持ひとつあり。内に金千両はだか金にていれおかれ、鎖まへ封印もなく、当番の広間番代り合の時分、蓋をあけ、み候までにて、受取わたし事済候よし承り伝へ候。君上の心持は此所をよくよく心得候て、をしへ奉るべきことなり。

○始にも申し如く、人の性は幼壯老の三時に順ひ
教戒あることなれば、幼少の君へはまづ幼少の時に
つれて、習慣を熟させ可申こと也。すでに一人だち
是非のわきまへもしり給ふ時には、又其時の心得
にてならはし奉るべきこと也。併いやしき諺にも
三つ子のたましひ百までと申せば、御幼年也とて
なほざりにはすまじきこと也。但し勁草堅木も

実生苗木の時はなべてやはらかなるものなれば、
大木のかげならでは風雨をしのぎ成木すべき

道理なし。故に師傅の人は幼少をいつくしみ、あは
れむ心を第一にして、大木のかげになり、ひなたに
なりて風雨をささへ、其かげに苗木の成長する
所を片時もわするまじきこと也。とにかくに習はぬ
経はよまれずといへる世話の通り古今の教訓に
通じ不申候ては、師傅の忠を尽さんとしても
行届ざること多かるべし。しからば先道を学ぶべき
こと師傅の要務なり。学問といへばとて、朝より

夕まで机のうへに書籍をひらき、眼をさらす
のみにあらず。昼夜の間には一時半時のいとま
は誰もあるもの也。其ひまひまをつとめて要文を
一行二行にても誦習して、この言葉はかくこそ、
その文言はかくこそと心に思ひひそめて、是を
日々の言行につとめて、世子を教るたねとせば、
詩書六経は申に及ばず、草紙物語のうちにも
いくらかも教のたねとなることはあるもの也。これ則
学問なり。別して幼くおはしまし候御方には、
むかしの物語のうちに、人君の有がたき

言行などを弘く覚え居てはなし聞せ奉る
こと、尤以て利益の道なり。

対人之問忠

臣下の御身分にては何よりまづ忠不忠の境を
篤と御弁被成度と御心付候つき、右の境とくと
御合点参り候様に可申述旨、御深切の御事先以
致感心候。忠臣の所行は時に随ひ事にのぞみ、
一概には難申事と存候。乍併一体の心持は
先心得申度事に候。知行格式は祖父代々伝へ
受たるものとのみ心得候て、君の高恩を戴く共
不存、ひたすらに自己一分の利害をのみ存じ、
忠敬の道を露いささかも弁へ不存ものは、人の形

にて人の心なきものなれば、もとより是非善悪の沙汰に不及候。聊も君臣といふことを弁へ知りたる人よりぞ、忠不忠の論には及べき事に候。凡人臣たるものは身分の尊卑にもよらず、生得の賢愚にもよらず、おのれ忠臣よと呼ばれたく存候は人の天性にて、万人同情に御座候。然共忠不忠の道を明らかに会得不致候へば、心一ぱい忠を致すと存候へども、いつしかと不忠におちいることを不知候。尤口惜き次第に候。まづ忠と申文字はまめと訓じ、まめはまめやかと申ころにて、心いきの親切に行届事に候。かりにも如才なく、身一分当座切にことを勤て、人みすなる心のなきことを申候。君は上に一人立給ひて、臣は下に数十人、数百人、数千人、君の大身小身に随ひ、臣の多少は有之候へども、いづれも下に立ならびて、一同に君の政事を手伝ひ、家国の安危を相談するものにて候。是を人の一身にたとへて、きみを元首と申候。元首は頭にて候。臣を股肱耳目と申候。手と足と耳と目の事に候。股肱耳目の四をあけて、鼻口唇舌爪牙百骸はその中に

こもり候。目は見、耳は聞、手はつかみ、足はあゆみ、口はくらひ、鼻はかぎ、唇舌爪牙百骸、上下左右に動き働きて、一身の主たる頭に随ふありさま、一人の君に下群臣の奉公をするに、ことなる事無之候。四支百骸の頭に随ひ動くこと、誠に如才もなく、まめやかなるものに候。手つかまんとすれば足すすみ、目がみるうちに耳がきき、相互に思ひ合たすけ合て、一身をかいほうすること、いはんかたなく候故に古より賢明の君上にいまして、忠良の臣、下に立ならば代は、たとへば一身達者無病なるもの起居運動すくやかに立廻りて、まめまめしきがごとくに候。手は足のすすむかたに向ひ、足は手に向ふかたにはしり、打も捉もたつもをるも思ひ合て動き働き、耳目口舌、欲する所のままに候。是を富強安楽なるありがたき御代とは申候。また暗愚の君上にいまして、不忠の臣、下に立ならば時は、たとへば一身虚弱多病なるもの起居運動すくやかならず、立廻りもぶせうなるがごとくに候。手つかまんとすれども足すすまず、足はあゆめ共手がきかず、たつもをるも心ままならず、耳目口舌欲

する所のままならず、是によりて困乱衰弊なる
国となり、浅ましき代とは申ことに候。一身は手足の
まめなるを以て無病と称し手足のまめならぬ
を以て多病と称す。国家は群臣の思ひあふを以
て富強をなし、思ひ思ひなるを以て衰弱をま
ねく。誠に忠なる人は何卒己が君を古の聖の
君にもならひ給ふやうにし奉りたく存候は
不及申事に候。然ば人我相互に思ひ合て手足
耳目の一身に随ふ如く、ねぢれもとる心なく、左右
上下一同に心力を合せ政を手伝ひ奉るべき
事候。是全く身一分の利害をすてて、至極公忠
なる心なくては相ならざるわざに候。人我互に
我が慢心をさしはさみ、忠勤は仕勝と心得たるは
忠に似て不忠の甚しきにて候、是則手はつかむ
役とばかり心得て、足のいたみをなでさするも
手の役と申ことをしらず、あしはありく役とば
かり心得て、手の廻らぬ時は蹴る踏むと申わざの
有ことをしらず、同じ一身につきながら、左右上下
すぢりちがひて、つまる所は一身の不自由におち
て、用にたたぬ手足と申ものにて、君のためには

かやうなる人を不忠不令の臣と申候。たとへて
いはば金奉行の金銀ををしみ、蔵奉行の米穀を
をしみ、諸払役、諸渡役の払ひ残のなく渡かたの
滞らぬやうと存候は職分の当りまへにて、忠に
ても不忠にても無之候。公忠の場を明らかに
弁へ候はば、金奉行も不肖をして存慮より多
くも出すべし。諸払役も不肖をして存慮より
ひかへて払ふべし。作事奉行は普請の出来ばへ
をこのめども金方の出の多きをいたはりて、己が
手際を十分にせず。勘定奉行は収納皆済をこ
のめ共諸代官の百姓へあたりのつよくなる所
をきのどくに存候て、皆済の御誉をかせがぬ
やうにと、相互に思ひ合て、我ひとり忠臣とはな
らず、人も我も不忠ものにならぬやうにところ
がくる。是を公正忠良の臣と称して、家国の至宝
と致し候事に候。己が一官の功を立んと存候時は、
他役所の迷惑はかへり見られぬ事故に、一分の功は
ここに立とも、多分の功はかしこにて損するな
れば、忠といふものにあらず。一人の君に対し奉り
ては莫大の不忠にて候。家国の上を存じ四面上下

行とどく心なきより出候事にて、古今ともに
かやうの類を姦邪の臣と名づけ申候。実忠は
目前の小功を見ず、家国永久の謀を専として、
自己一人の手柄をかせがず、万人のつとめをたす
け、はげますを君子の大忠とは申候。戦場に赴く
士は一己一己手柄をかせぐ心なく候ては敵に
勝べき道理は無之候。それすら一己きりの手柄
をのみ専にかせぎ候時は、他組にて十人討死は
するとも、我組にて三人功名をすればよしと存
候時は、千騎も百騎同様にて軍の負は大将一人
の難儀と相成候。常々見もしらぬ疎遠なる朋輩
にても、手詰の場にては肉親兄弟の如く助太刀
介打をいたせばこそ、味方の勝利とはなるなれ。
大将壱人への奉公是に過たる忠は無之候故に、
軍令にはぬけがけの功名をかたく禁じ候て、第一
の越度に申付候事に候。一人の手柄をむさぼりて
味方の勝敗をかへり見ぬ不忠ゆゑに、和漢古今一同
に重きおきてとはいはしたし候事に候。昔楚国の
執政子文と申候人、三度まで執政になり候へども、
そのたびたびにさのみ嬉しと存候顔色もなく、又

三度まで執政をめし放れ候へども、其時々うらめし
と存候顔色もなく、自分の勤の内に宜しかりし
こともあしかりしことも、跡役の心得になるべきことは
こまかに申送りて、つつみかくす心無之候。これ
自身の利不利をわすれて、君の家国の為をのみ
如才なく大切に存候心故に、孔子も忠也と称し
給ひ候。すべて人の交りは礼讓を第一と致し候。
礼讓とは、しきふかく人をそらさず、我よきにはこ
らず、人のよきをたつる事に候。人のよきをよきに
立る心だに有之候へば、人見ずなることを致べき
やうなく、人みずなる所行だに無之候へば、人と
思ひ合事は不及申、物ごとむつまじくゆきわたり
候て、家国安富の相談も成就致すことに候。奉公
をしのぎと心得候不忠のわざは、礼讓の心なきより
おこり候ことにて、家国の災はみな是より生じ候
故に、孔子もよく礼讓を以て国をおさめば何か
あらんとは被仰候。むかし齊の執政管仲と申人、
礼義廉恥の四を四維となづけて、国を治るひかへ
綱とさだめ候。この四のひかへ綱たゆむ時は、国則
滅亡すと申候。礼は不踰節と申候て、人々身の

ほどほどを守りて、上をおかししのぐ心のなきことに候。義は不自進と申候て、上の引たてをまたず自己より立身をたくむやうなる所行のなきことに候。廉は不蔽悪と申候て、我あしき事をおしかくして、今日を過るやうなる、さもしき所行のなき事に候。耻は不従枉と申候てたとひ身の為よければとて、よこしまなるかたに心をよせざるけなげなる所行を申候。この四は人の所行第一のひかへ綱にて、是をとりにながしては不参事に候。人の臣下たるもの此四のひかへ綱にだにはなれ不申候へば、自然と忠良の臣となりて、家国の為に至宝の人と成候事に候。群臣それぞれに官職をわかち受て、君の国政を取扱ひ申候は、たとへて申さば、楽人共の鐘太鼓笙ひちりき、さまざまの道具を持よりて、一曲をかなで候やうなる物に候。五音六律調子揃ひて何の申分もなきは、明君の朝に賢臣の揃ひたるにて、すなはち聖人の御代なればいかで及べき。せめてよく心得たる上手同志の出合たる時は、すこしづつのめりかりは有之候へども、笙はひちりきをたすけ、かねは

太鼓をたすけて、相互に人の間のぬけぬやうに
一曲ごと故なくかなですまして、又もなき殊勝の
きき事にて候。もし下手楽人のあつまりたる
時は、笙は笙、笛は笛斗を我一と吹そうし、鐘
太鼓は我一と打あげて、我こそ笛の上手ときか
れたく、太鼓の名人とほめられたく、余所の緩急
めりかりにもかまはず、おのれおのれが調子を一
ぱいにせいをはりて、したりがほなれ共、聞人は
耳をふさぎ腹をかかへて、一曲の終るをまちかね
候こと口をしき次第に候。是ひとへに思ひあふ心
なきより、其中には実々上手も有べく候へ共、
ともどもに聞まどはされて、功者も無功者も一同
に下手楽人のそしりをうけ候事、あぢきなき
ことに候。君の政にしたがふ士大夫、人々己々この
所を心得候はば、目出度心なるべくと存候。已上。

建学大意

君相 三個條

○日月星辰春夏秋冬は、天地有しより其運を改

めず。君臣父子夫婦兄弟朋友は、人民有しより其倫

を改めず。孝悌忠信仁義遜讓は、道訓ありしより

其徳を尚ばざるものはなし。然れば時勢古今と

変じ、風俗五方を異にすれども、安上利民の政

を立るには、先徳を尚ぶを最初とす。尚徳とは魯の

大夫南宮敬叔が羿善射、羿盪舟、俱不得其死然、禹

稷躬稼而有天下と申たる時、孔子の君子哉若人、

尚徳哉若人とのたまひしを以て、尚徳の本義と

すべし。善射盪舟その材芸の万人に超絶するを

いふなり。然れ共其人もとより不祥小人、自己一人の

欲を逞して、世を憂へ人を恤む仁心なきを以て、

終には身を亡すに至れり。躬稼すといふはさのみ

智恵才学にもよらず、卑辱煩勞凡人にことなる

ことなきに似たれども、其人もとより吉祥善人、自己

一人の安逸を忘れて、世を憂へ人を恤むの仁心

切なるを以て、終には天下の人心を応受す。されば、

安上利民の政は、仁義徳行を尚ぶに成り、利口才

智を用ふるに敗るること、古今の鑑瞭然たり。日月星辰は万古の天地を照臨し、春夏秋冬は万古の気節を運序すれ共、自以勞とせず。自以功とせず。即天地の大仁を見て天地の大讓をしるべし。故に此仁讓にのつとる人を有徳君子と称し、此仁讓にそむける人を不祥小人といふ也。君子上に位すれば恩恵下に降る故に万民承順す。小人上に位すれば貪虐上に恣なり。故に万民怨憤す。治道は承順に起り、悖乱は怨憤に生ず。是を以て有徳君子を尊崇して、顕位貴職にすゑおくを

徳を尚ぶとはいふなり。徳は遜讓より美なるはなし。美德は仁者の所行也。不徳は驕満より悪なるはなし。悪徳は不仁者の所行なり。館を「興讓」と名づけしこと、美德を修し悪徳を除せんが為也。

○「分領」は腹の内より「分領」「侍組」は腹の内より「侍組」

襖褌の内より諸人に頭をさげられ、己に西東を
知に至れば、自高貴なるをしらぬ童子もなく、
驕泰の心知とともに長じ、亢傲の態心とともに
成り、四書一通も読しらねども、元服すれば終には
「十五万石」の執権になる身分と落付たる痼疾、

いかなる良薬を用ひてか仁厚恭敬の君子とはなるべき。頭位貴職に仁義の人なくば、何を以て忠愛の徳を施し行ふべき。忠愛の徳上より降らずば下民何の所に手足をおくべき。但し夫とても二百年來相済きたる国風なればこの行末何の思ひかあらんといはば、教学の道は沙汰におよぶべからず。興讓とは讓をおこすとよみ、讓を興すとは恭遜の道を繁昌さすること也。一国万民の天と奉仰、君上の思召を以て恭遜の道を修業せさせ給ふ御役所にも、腹の内より貴きものはやはり父兄の上に齒し揖遜辞讓の道をならはずば、何国いかなる所にてか恭遜の徳のうるはしきを弁へしるべき。「興讓」の館において御ゆるしを受たる驕泰なれば、最早一国に憚る所有べからず。然れ共郷大夫は職禄を世にし、幼弱なるも長老の上にてたたねばならぬは勢也。故を以て君上より其位を貴し、其権を重し給へば、朝廷には爵にしくはなし爵位身にあれば如何はすべき。気のどくながらも長老賢者の上に座することぞとおもふ心をもたせんが為に、古先聖人の道徳を学ばせ、

今日の恭敬を習はして、従来の驕逸をふせぐこと也。
学宮の門高きこと僅に六尺、戸扇の厚さわづかに
三寸、内には徳行の尊きを知り、外には爵位の貴
をしらしめんこと何の恥とかすべき。何の害とか
すべき。是をはぢ是を害とする心あらば、儼然
たる不祥小人なり。是を群僚の上に位せしめ、
政柄を預ること、嬰兒に白刃をあづけて僥倖に
けがのなきを願ふ如き心ならば、仁知の沙汰には
およぶべからず。一国の天と奉仰、君上、万民の安利
を思召れてこそ、もったいなくも南郊の汚泥に
御足をけがし、鋤鍬を取給ひし其御心を察奉り、
世祿の大臣蓑笠に風雨をしのぎ郊野に起臥する
は、希代の美事、六十余州の手本なるべし。驕泰
の習ひ性となり、耳目の珍らしき所より、よからぬ
ことと思ひ誤り、嚴刑を犯し四方のあやしみを受る
ことはいかなる所より出けん。仁義恭敬の道を尊び、
自己の身分を高ぶらすは、いかでかか、くちをしき
ふるまひの有べき。前車の覆るを見て後車の戒
とす。雪ふみを先へ、たつるは後ろより行人のたふる
まじき為なり。此所をかんがみんこと、学宮の教の

専要なるべし。善にしたがふこと崩るるが如く、己を
すてて人にしたがふは古の明訓なり。

○水穀は人君なり。薪火は士農工商なり。郷大夫は
鍋釜なり。米は上白疑ひなし。薪は燥材よく燃れ
ども、中をへだつる鍋釜がわれひびけたらば何を
以て飯をたき出すべき。先よき鍋を鑄立て、さて
其上に飯の煮あんばい火のもへかげんもいふべき
ことなり。釜を鑄るをはじめとす。君を鍋釜にすべ
からず。薪はなべかまにもならぬは、御先祖以来の
常典いかはせん。さらば鍋こそ肝要の道具なれ。

学宮のふいごを以て、よき鍋を多く鑄立て、一国
の性命をつなぐ飯をばたき出べきこと也。よき鍋
を鑄立ること政の根元なれば、学宮の師長はふい
ごもとの惣奉行、大切の職分は申におよばず。

しかしながら元より高明賢徳一国の仰望する
人にもあらず、其権自軽し。然れども師長は先
聖の御側取次にて其言は夫子の御意也。三奉行
まづ一月一次講堂に拝参し、師長に敬侍して
恭遜の礼を崇し、弟子の行を励すべし。こひね
がはくば学宮の体面を正すにたらんか。

師長 二個條

○師長の任は人に信ぜらるるにあり。人に信ぜらるるは己が守りの堅固なるにあり。己が守りの堅固なるといふは、いつまでもおなじことを退屈せず、人の信不信をとはず勤行こと也。久しておこたらず、人の信は其中より生ず。己が天性なればせんかたなしと自身よりゆるしを出し、企て及び俯して就の修業をすてば、古人弦韋の戒は美行とするにたらず。師長はまづ自弦韋を帯べし。剛柔利鈍其才のままに取量て、おのおの一器物に備ふるは人を用ふる法にて、人を教る法にあらず。求也退故進之由也兼人故退之とのたまひしを以て、仲尼の人をとりかひ給ひし容子をおもんみるべし。つよき馬は手綱をひかへ、弱き馬は鐙を入れて、才不才もろともにすすむやうに心を尽すべきことなり。能を教へ不能を矜み、書生の成敗を己が任にして、孝悌忠臣、仁義遜讓の行義を習慣せしめ、一館の父母となりて善を成し悪を掩ひ、厚に厚をかさねて教化の道を補助する事を、終食のまも油断なく心得べきこと、師長の極意

なるべし。師長の厳なるを尊ぶといふことは、教訓の法を厳正にして、子弟に怠慢を生ぜしめざるやうに取あつかふこと也。面を四角にし臂をはり鞭扑をとりしぼりて、あやまちあるは責讓せんと、ぎせいをはるを厳にするとはいふべからず。惣て教諭の仕法は学記に詳悉すれば、まづ此篇を講明すべし。

○学記曰、小雅肆三官其始とは今般建学の主意也。

「興讓館」に出入して其終はいかなる人になれる、
「分領・組頭」の子は御家老・御番頭・御城代・御小姓頭

ともなり群僚の上に位して一国の安危を任す

「三手」の子は大目付・三宰配・六人年寄・諸奉行・諸物

頭

となり、命を上にうけ令を下に施す。尊卑貴賤

職掌に差等はあれども、上に奉じ下へのぞむ人

にあらざるはなし。この行末を思ひはかりて、銘々

の心持を覚悟せしめ、他日の用に備ふること最初

第一の教誨とすべし。

生員 一個條

○生員は命をうけて学館の弟子にえらばれたれ

ば、在館中別の奉公とてもなし。書典に通じ
徳芸にならひ、他日に上の用となるを以て、今日
の業とす。その勤かたは師長の教にしたがふより
外はなし。されば別に心得を論ずるに及ばず。

こはある国に学館たてられし時、作りてあたへたる
おきてふみなり。